

# 肺がん 免疫チェックポイント阻害剤 インフォームドコンセントの実態

## 調査背景・目的

肺がん領域では、免疫チェックポイント阻害剤と従来の化学療法との併用などが新たに承認され、診療ガイドラインが更新されるなど、臨床現場における治療戦略は今後より複雑化することが予想される。

そこで、本調査では、治癒切除不能ステージIIIB-IV・術後再発のEGFR/ALK/ROS1/BRAFすべて陰性、または不明のNon-SQ患者さんに、臨床医が提示する選択肢・レジメン決定の過程を聴取し、医療現場における実態を確認した。

今後どのように変化するのか、経時的に確認をしていく予定である。

## TOPIC

- ✓ 1次治療で患者さんへ提示される治療選択肢は1種類のみ。  
2次治療では、複数種類が提示される傾向
- ✓ 医師が提示した免疫チェックポイント阻害剤が、患者さんやそのご家族の希望で処方に至らないケースは1次・2次治療において3割程度。  
その理由は重篤な副作用への不安や、高額な医療費など。

## 調査概要

手法：インターネット調査（全国）

治療選択肢提示は最大5症例、中止理由は最大3症例記入にて聴取

対象：100床以上の施設に勤務している呼吸器内科/外科、腫瘍内科の医師

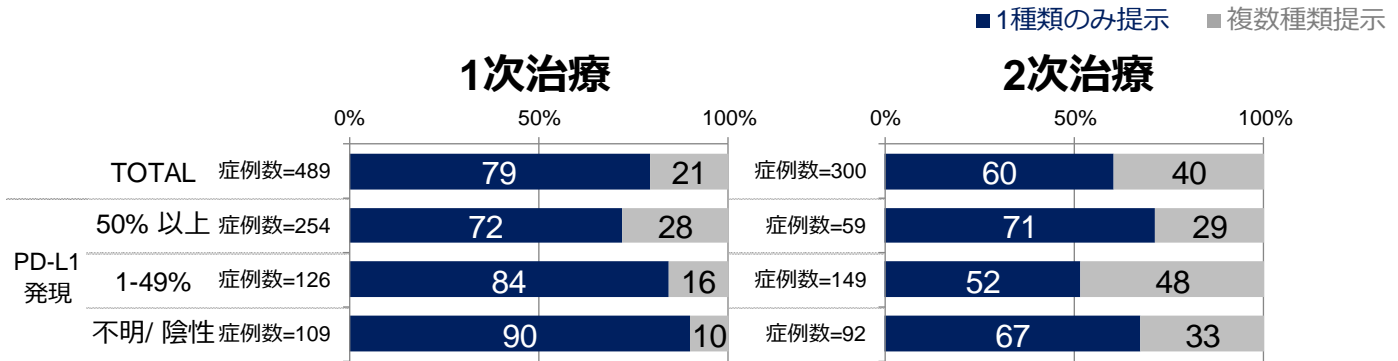
有効回答数（医師数）：243サンプル

調査期間：2018年8月27日～9月3日

# 調査結果

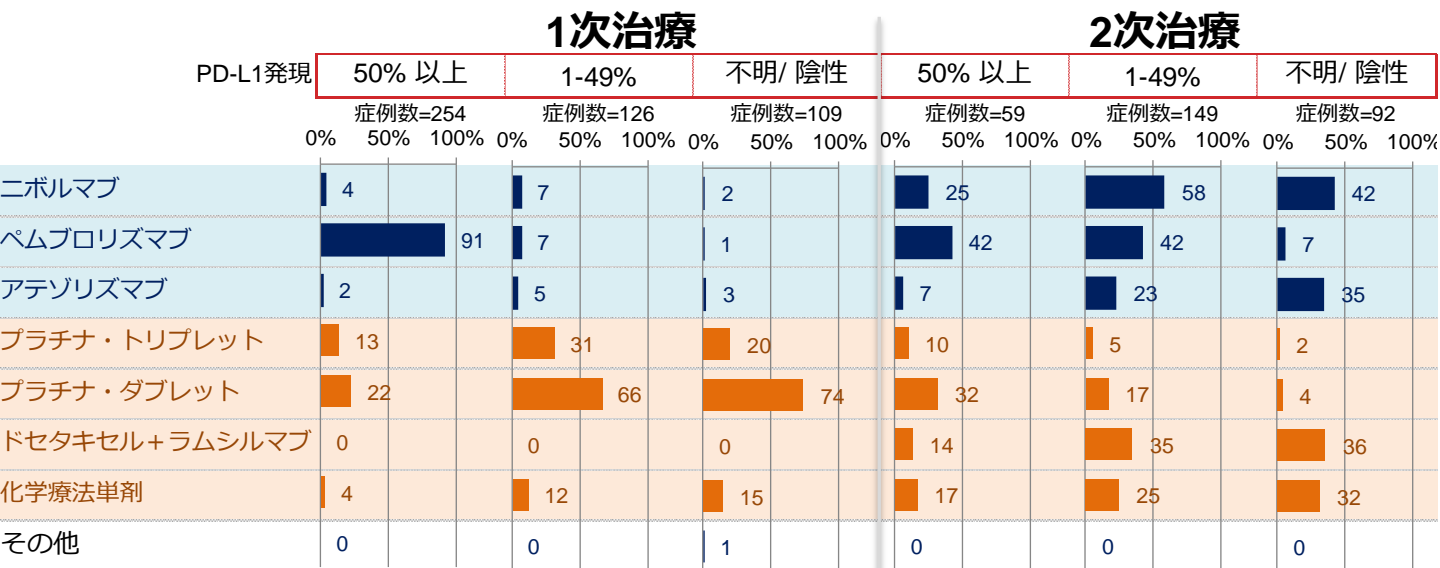
## PD-L1発現別、患者さんに提示したレジメン数

- ✓ 1次治療を受けた、治癒切除不能ステージIIIB-IV・術後再発のEGFR/ALK/ROS1/BRAFすべて陰性、または不明のNon-SQ患者さんの8割程度は、治療選択肢の提示が“1種類のみ”でした。これは、PD-L1発現に関わらず多い傾向が見られました。
- ✓ 2次治療では、1次治療と比べて複数種類が提示される傾向でした。特にPD-L1発現1-49%の患者さんは複数種類提示される割合が高いことが確認できました。



## PD-L1発現別、患者さんに提示したレジメン詳細

- ✓ 1次治療のPD-L1発現50%以上はペムブロリズマブの提示がほとんどを占めていました。PD-L1 1-49%・陰性/不明は化学療法、特にプラチナダブレットの提示が多い傾向でした。

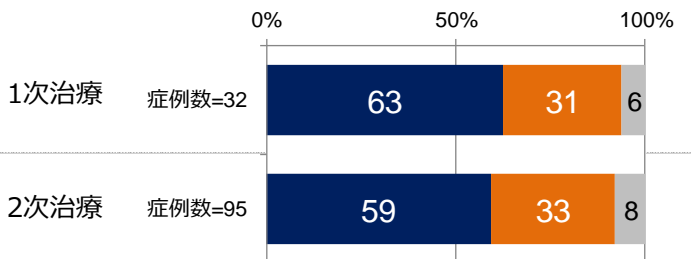


特に1次治療における選択肢が増えている中、より複雑化する治療戦略の中で、臨床現場のトレンドがどのように変化するのが注目されます。

今後も臨床医から患者さんに提示されるレジメンの変化を経時的に確認していきたいと考えています。

## 免疫チェックポイント阻害剤3剤： 患者提示後、処方に至らなかった理由

■主治医の判断 ■患者・家族の希望 ■その他



## 免疫チェックポイント阻害剤3剤： 処方に至らなかった理由 患者・家族の希望、回答例

重篤な副作用が怖い
治療効果が不安
医療費が高額で、支払いが難しい

- ✓ 免疫チェックポイント阻害剤3剤（本調査実施時点で使用可能となっていたニボルマブ・ペムブロリズマブ・アテゾリズマブ）の中で、臨床医によって提示されたが、患者さん・ご家族の希望で実際の処方に至らないケースが、1次・2次治療とも3割程度確認されました。
- ✓ 上記の理由は「重篤な副作用が怖い」や「医療費が高額」など。
- ✓ 臨床医から患者さんに提示される治療選択肢が増えることも予想される中、今後はより一層、患者さん・ご家族側の懸念の解消や知識習得をサポートしていくことが、治療継続において重要となってくると考えられます。

本調査に関する  
お問い合わせ

株式会社アンテリオ [www.anterio.co.jp](http://www.anterio.co.jp)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台4-6 御茶ノ水ソラシティ13階 電話：03-5294-8393（会社代表）

オンコロジー領域のことなら

ファーマ・ソリューション事業部 オンコロジー領域専門グループ  
メール：[ant-onc@anterio.co.jp](mailto:ant-onc@anterio.co.jp)

 **anterio**  
DECISIONS WITH CONFIDENCE